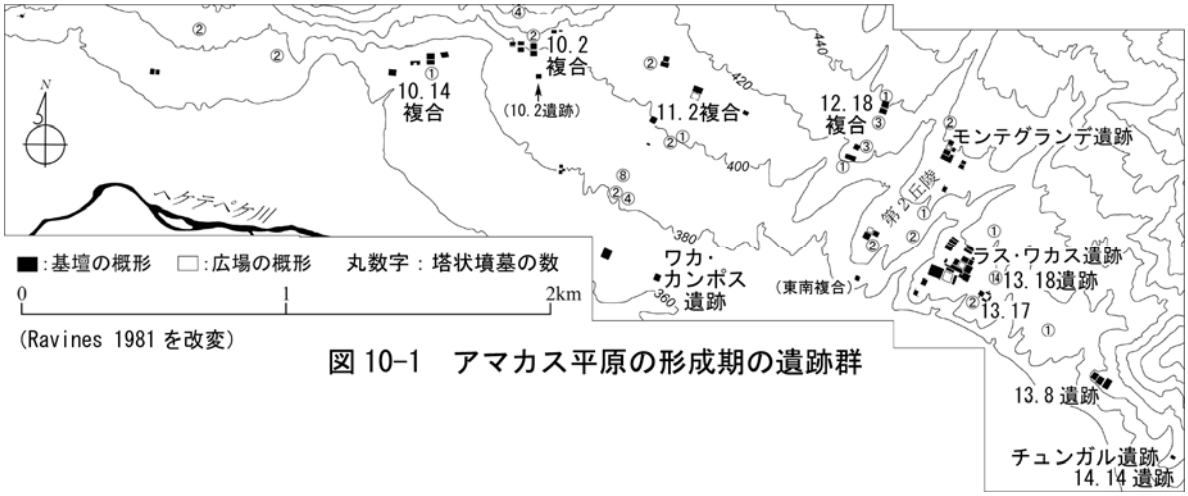
ヘケテペケ中流域における形成期社会の動態

鶴見　英成（日本学術振興会）

１．ヘケテペケ中流域の先行調査と研究テーマ

１−１．ヘケテペケ中流域における先行調査

1960 年代のヘケテペケ川では、エル・ニーニョ現象による農業不振の影響もあり、中〜下流域にて地元民による遺跡の盗掘が横行し[Alva 1986]、先スペイン期の遺物が数多く市場に出回った。とくにテンブラデーラ村周辺は、形成期の精巧な土器が多く出土した地域の一つとして国際的に知られるようになったが、考古学調査が行われないまま遺跡の破壊は続いた。その後テンブラデーラ村の西方約９km、ガジート・シエゴ村にダムの建設が決定し、海抜 400m以下の広範囲が貯水池に水没することとなったため、70 年代末から 80 年代初頭にかけて水没予定地の事前調査が集中的に実施された。まずR. キーティングが 77 年に一般調査を実施し、北岸モンテグランデ村とチュンガル村の間のアマカス平原（図 10-1）に形成期の神殿遺跡が集中していることを報告し、とくに大規模なラス・ワカス遺跡（図 10-2）を中心的に紹介した[Keatinge 1980]。ついでペルー文化庁主導の緊急調査プロジェクトPRAJ（Proyecto de Rescate Arqueológico Jequetepeque）と、ドイツ人考古学者らの率いる調査団“Comisión Técnica de Arqueología y Comparada por el Instituto Arqueológico Alemán”がそれぞれ大規模な調査に着手した。前者はR.ラビーネスを中心に、80〜82 年にかけて中流域・下流域の遺跡登録を進め、中流部北岸[1]の水没予定地の詳細な遺跡分布地図を刊行した[Ravines 1981]。特にアマカス平原ではラス・ワカス遺跡を含む多数の遺跡を清掃し、いくつかの遺跡では発掘調査も実施している[Ravines 1982; 1985]。後者は 80〜83 年にアマカス平原にて複数の形成期遺跡を発掘している[Carcelén 1984; Paredes 1984; Tam e Aguirre 1984]。特にモンテグランデ遺跡の発掘は大規模で、神殿と住居の建築プロセス[Tellenbach 1986]、土器分析[Ulbert 1994]について詳細な報告書を刊行した[2]。



(Ravines 1981 を改変)

図 10-1　アマカス平原の形成期の遺跡群

1985 年に貯水池が完成すると、中流域の遺跡群は完全に破壊・水没したという認識が研

1 南岸サリトゥラル平原の一部を含むが、登録した遺跡に登録番号が割り当てられず、記述もなされてない。

2 なお下流〜中流域の岩絵を登録・図化したV.ピメンテールの業績も、上記のような一連の事前調査と連動している［Pimentel 1986］。またW.アルバはヘケテペケ川流域（一部、サーニャ谷及びランバイェケ谷中流域を含む）からの盗掘品とされる土器・土製品を図録化した[Alva 1986]

究者の間で共有され、その後の研究成果を踏まえてこの地域を議論する機運がなかった。しかし 99 年の北部海岸一般調査によって、ラス・ワカス遺跡が水没・削平を免れて現存することが確認され[坂井ほか 2000]、さらなる調査が可能であることが判明したのである。

１−２．調査の目的と経緯

海岸部クピスニケ社会との強い関連性が見いだされたことにより、クントゥル・ワシ遺跡における社会動態について、山地のみならず海岸部まで視野に含めた洞察が必要となった。そのためヘケテペケ下流域のリモンカルロ遺跡が調査され（本書所収の坂井論文参照のこと）、形成期中期の資料が蓄積されたが、次に両者を地理的に結ぶヘケテペケ中流域の知見の不足が問題となった。先述のアマカス平原とラ・ボンバ遺跡[Seki 1997]に限っては詳細な発掘調査事例があったが、いずれも得られたのは主として形成期前期のデータであり、クントゥル・ワシとの関係において最重要である中期以降の社会動態が不明、とくに後期にいたっては全く手がかりがなかったのである。この問題点をふまえて調査を立案するにあたり、中流域の在地社会の通時的な変容プロセスの解明と、クントゥル・ワシと海岸部とに密接にリンクした、より巨視的な視点からの社会動態解明という２点が目的となった。調査の方法であるが、ラス・ワカス遺跡（図 10-2）が形成期前期から中期に対応する神殿遺跡であり、一帯で最大級の規模を持つことが表面調査から十分に想定できたため、まずここから発掘調査に着手して層位的に確実なデータを採取することにした。さらにシーズンごとの調査成果を次の調査にフィードバックする形で対象を拡げ、計３シーズンで一応の見通しを得るにいたった。調査内容の経緯は以下の通りである。

2003 年にはラス・ワカス遺跡の神殿域を発掘し、形成期前期から中期にかけての建築と土器の変遷を大まかに把握した。またアマカス平原を中心として遺跡地表の遺物採集を実施し、先行研究の報告結果を検証した。結果、ラス・ワカス遺跡の拡張と、周辺の遺跡数の減少が同時に進行しているという見通しを得た。同時にアマカス平原の外でも小規模ながら一般調査を実施し、レチューサス遺跡を登録した[Tsurumi et al. 2003; 鶴見 2004]。

2004 年にはラス・ワカス遺跡の神殿域を再度発掘し、前年度の成果を検証し訂正を加えた。さらに神殿後背の緩傾斜地にて試掘を行い、居住域の存在を確認した。また東に接する 13.17 遺跡と、貯水池水位の下降に従って現れた 10.2 遺跡にて、小規模に発掘を実施した。結果、形成期中期にラス・ワカス以外にも機能した神殿があったこと、その分布がアマカス平原東寄りに集中しているという見通しを得た。一般調査も対象地域を拡げて実施し、下流側はパイ・パイ村、上流側はヨナン村までを含め、未調査だったアマカス平原対岸も踏査した[Tsurumi et al. 2005; 鶴見 2005]。

2005 年にはラス・ワカス遺跡の居住域を中心的に発掘し、また前年度までに確認した５つの遺跡にて小規模な発掘調査を実施し、セトルメントパターンの変化についての前年度の仮説を検証した。また一般調査の範囲を、下流側はエル・マンゴ村、上流側はヤヤン村まで拡大し、下流域とクントゥル・ワシ遺跡の間の遺跡分布図を埋めることができた[Cholán et al. 2006]。

次節以降、調査の成果を整理して記述していく。まずは一帯の土器編年と建築の特徴をとらえる上で鍵となったラス・ワカス遺跡について、やや詳細に記述する。ついで小規模な試掘調査を実施した７遺跡、さらに一般調査で新規に発見された地点を含めた中流域全

体の形成期遺跡群について記述していく。

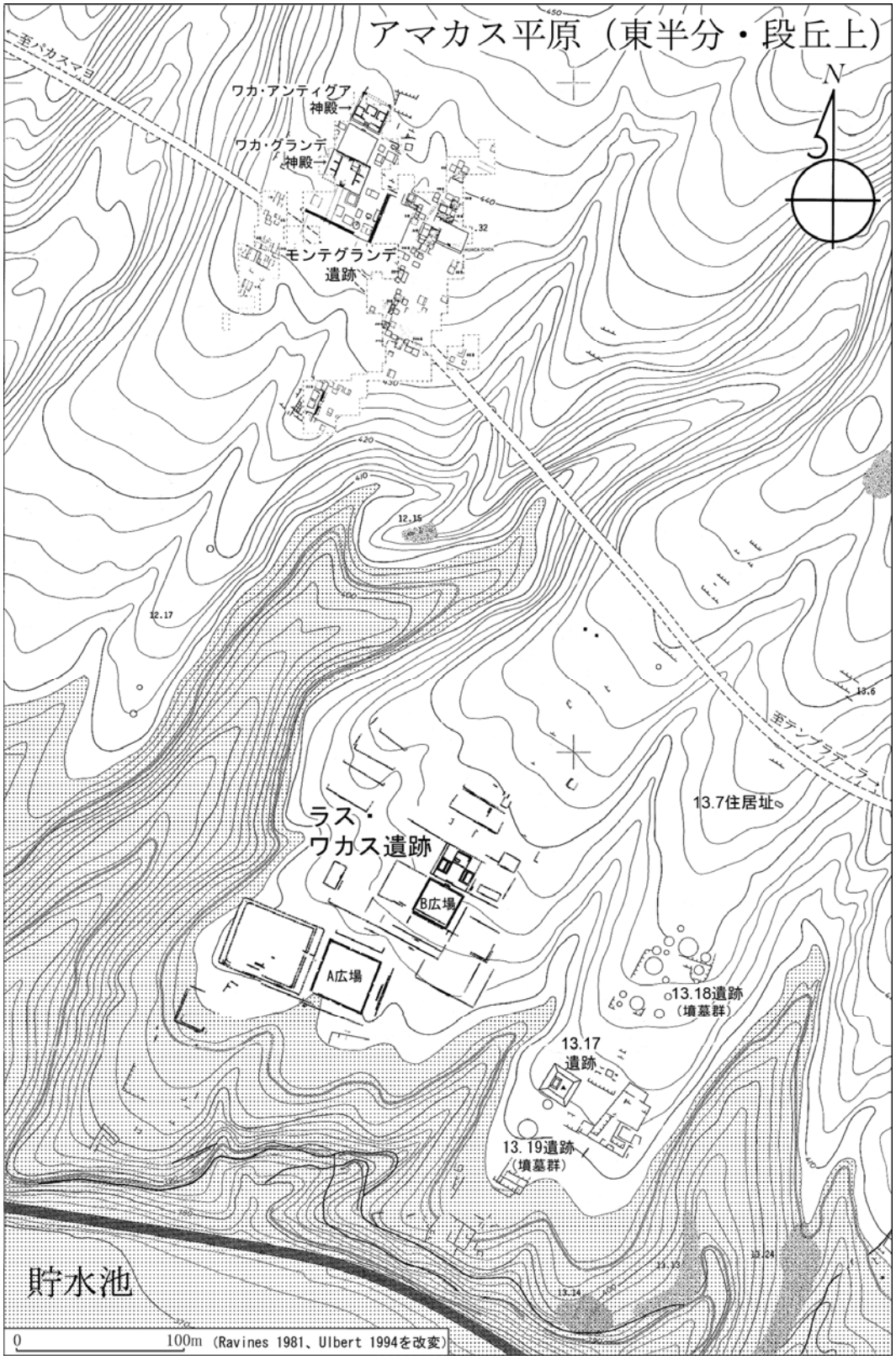


図 10-2　ラス・ワカス遺跡とその周辺

２．ラス・ワカス遺跡の発掘調査

出土土器の変化と建築更新の過程から、ラス・ワカス遺跡における編年はアマカス期（形成期前期）・テンブラデーラ期（形成期中期）に分けられる。以下、各時期の土器と建築についての概略を示し、他の遺跡との編年上関係と、埋葬形態の差異について記述する。なお文中の方位は磁北ではなく、発掘グリッドの方向に準じた便宜的な表現である。

２−１．ラス・ワカス遺跡の土器

２−１−１．アマカス期の土器の概要（図 10−3）

ラス・ワカスに隣接するモンテグランデ遺跡では、A 土器という赤褐色の胎土の土器と、B 土器という黒褐色の土器、そして両者の折衷である少量の C 土器が報告されている[Ulbert 1994]。ラス・ワカス遺跡アマカス期の土器のバリエーションは、ほぼ完全にこれらに含まれると言って良い。ただし A 土器のうち装飾鉢(器形 A7、A8)を欠き、C 土器は広口の鉢のみに限られる。またモンテグランデで例外的とされる装飾技法、たとえばアップリケ帯への指での刺突などが、より多く見受けられる。なおアマカス期の土層は総じて薄く、建築フェイズごとに土器の明確な変化を捉えることはできなかった。

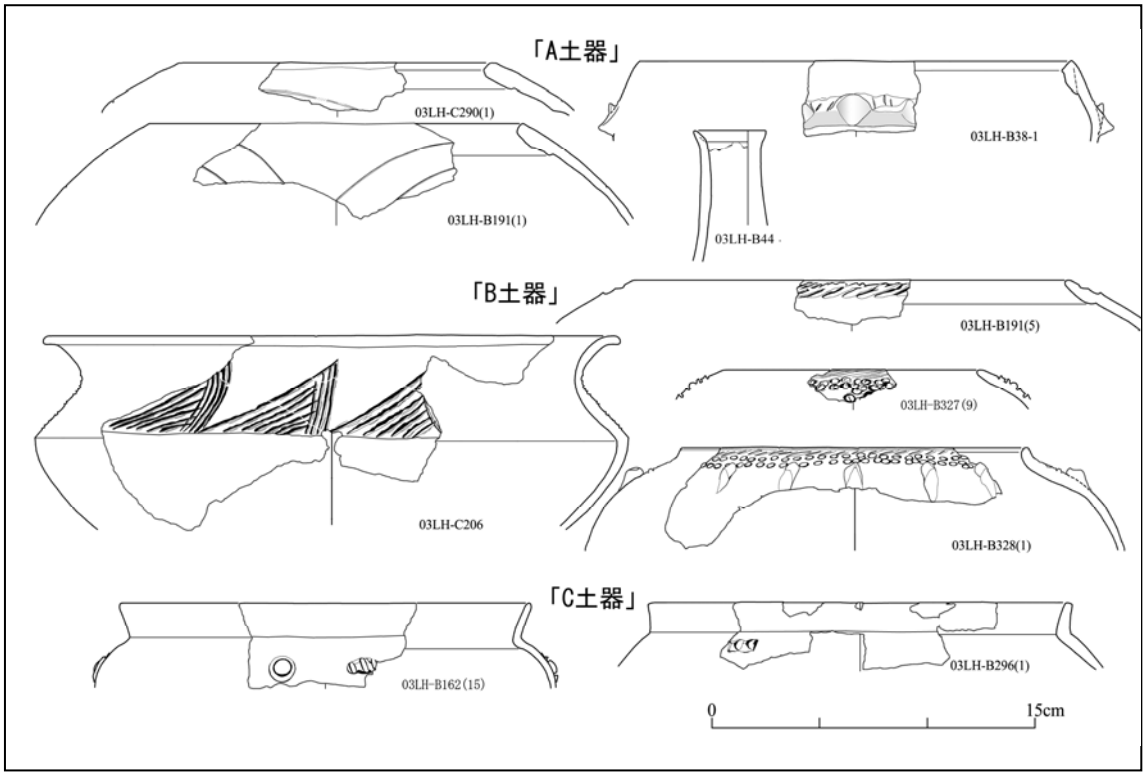


図 10−3　ラス・ワカス遺跡アマカス期の土器サンプル

２−１−２．テンブラデーラ期の土器の概要（図 10−4）

層位との対応から、テンブラデーラ期の土器は大きく２時期に分けられるという見通しが得られた。建築フェイズとの対応からそれぞれをテンブラデーラ１期、テンブラデーラ２期と命名する。

テンブラデーラ１期には、アマカス期の A 土器と同じ胎土の粗製土器が見られるが、より厚手で、無頸壺口縁から斜めに下る平行線など特定の文様が現れる。また A 土器と同じ胎土のボトルが引き続き製作されたが、長頸注口だけでなく鐙型注口の器型が加わる。また黒色・白色で表面がよく磨研された土器や、焼成後に赤・黄・白などの顔料を充填する装飾技法の土器、赤・紫などを用いた多彩色土器などが登場する。

テンブラデーラ２期の粗製土器は、胎土じたいは前時期と同じだが、含まれる混和剤が粗く、器壁はさらに厚くなる傾向がある。また短頸壺では、アマカス期以来の外反型の頸部に加え、円錐台形にすぼまる頸部が登場する。ボトル土器には、極めて堅く緻密な胎土のものが現れる[3]。うち灰色のものは、海岸部でクピスニケ土器と呼ばれ、クントゥル・ワシ遺跡でID Gris Finoと分類されるものとよく似ている。またオレンジ色のものはクントゥル・ワシ遺跡のID(KW) Rojo sobre Anaranjadoと共通性があるが、比較すると胎土はやや粗く、また赤色だけでなく白色の彩文もあるなど、完全に一致するものではない。

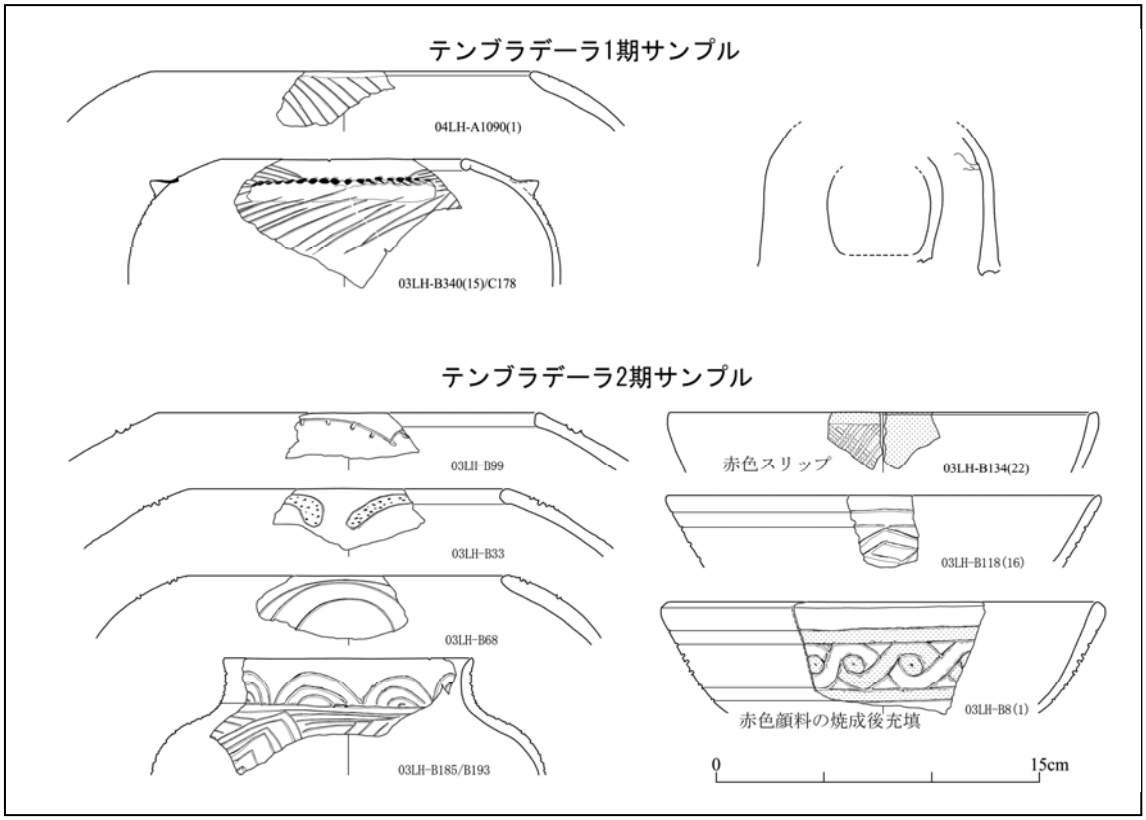


図 10-4　ラス・ワカス遺跡テンブラデーラ期の土器サンプル

２-２．ラス・ワカス遺跡の建築フェイズ

以下、建築フェイズについての現時点での解釈を提示する。年代解釈の詳細については本書「クントゥル・ワシ遺跡の年代的位置」を参照されたい。

3　灰色とオレンジ色を同一個体が発色する事例が複数あり、両者は同一の胎土が焼成の雰囲気により異なる色を帯びたもの、という可能性がある。

２－２－１．アマカス期建築の概要(図 10-5)

アマカス期の建築フェイズは２つに大別できる。最初のアマカス１期は主として居住域としての利用であり、小規模な建築がまばらに分布する状況であった。うち A1 基壇①が埋められた年代が 3200±35BP（約 1450b.c.）以降と求められている。また D4 基壇は北西の角しか残っておらず、おそらく北側から斜面を下ってきた水流によって破壊されたと見られる。同様の被害はモンテグランデ遺跡でも報告されている。

つづくアマカス２期には A1 基壇②と C1 基壇①という２つの大型基壇が成立し、ラス・ワカスは神殿建築として機能し始めた。いずれも１度の改変を経ているので、建築フェイズはさらにアマカス 2a 期と 2b 期に細分できる。C1 基壇①が改変された時点の年代は 3150±40BP（約 1350b.c.）以降である。また C1 基壇の北側にやや距離をおいて、粗い石で築かれた低いテラス状基壇群である D1 基壇複合や D2 基壇複合が設けられたが、これらは居住域と見られる。堅牢な神殿建築に比べ、造りの悪いこれらの建築は水害に弱く、アマカス 2a 期と 2b 期の間にも流水による破壊の痕跡が残っていた。次のテンブラデーラ１期建築に覆われることになった炉から、3080±30BP（約 1250b.c.）の炭化物が採取されている。

なおアマカス期の基壇建築群は、複数が直に接する場合を除いては、地山の上に互いに隔たって配置される、すなわち床面によって接続されないことが特徴的である。

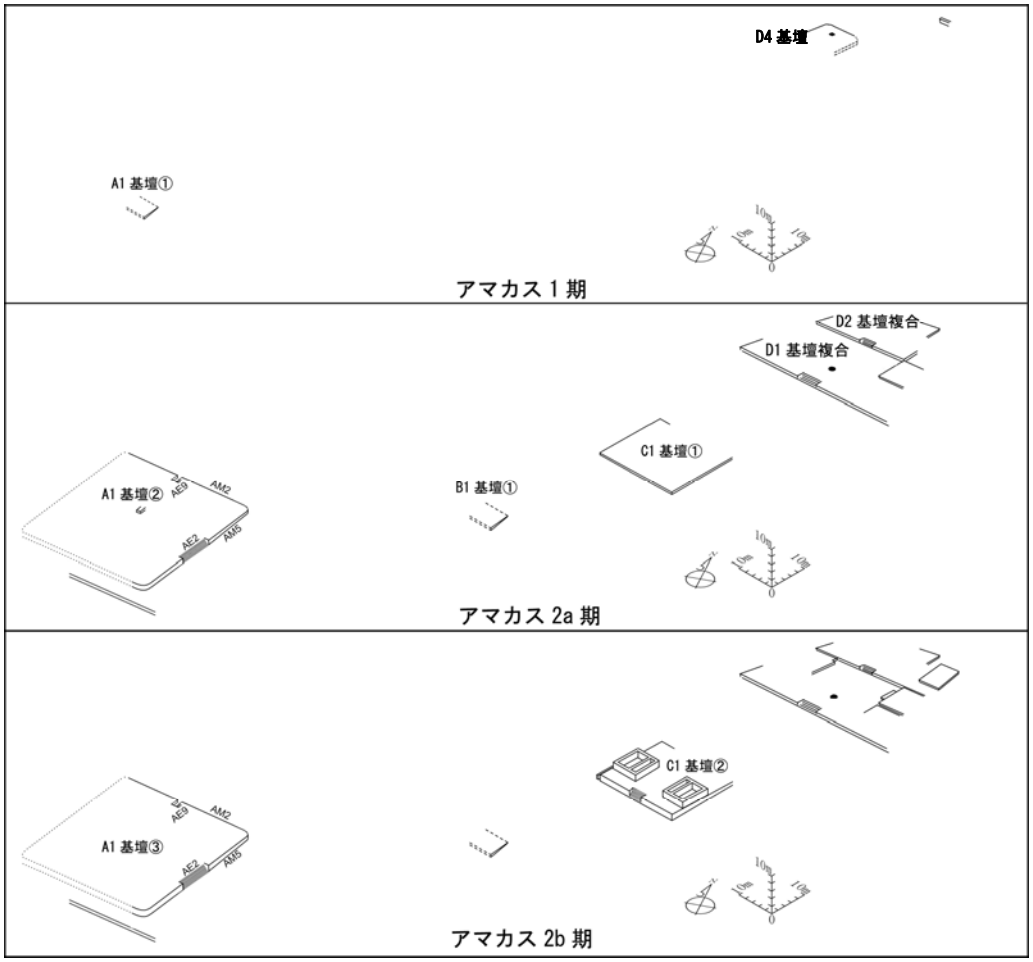


図 10-5　アマカス期の建築フェイズ

２-２-２．テンブラデーラ期建築の概要(図 10-6)

C1 基壇④の南側に多量の土砂が盛られ、B 広場①が建造されると同時に、高さ・面積ともに大幅に増大した A1 基壇④が成立したのをもって、テンブラデーラ１期の開始とする。

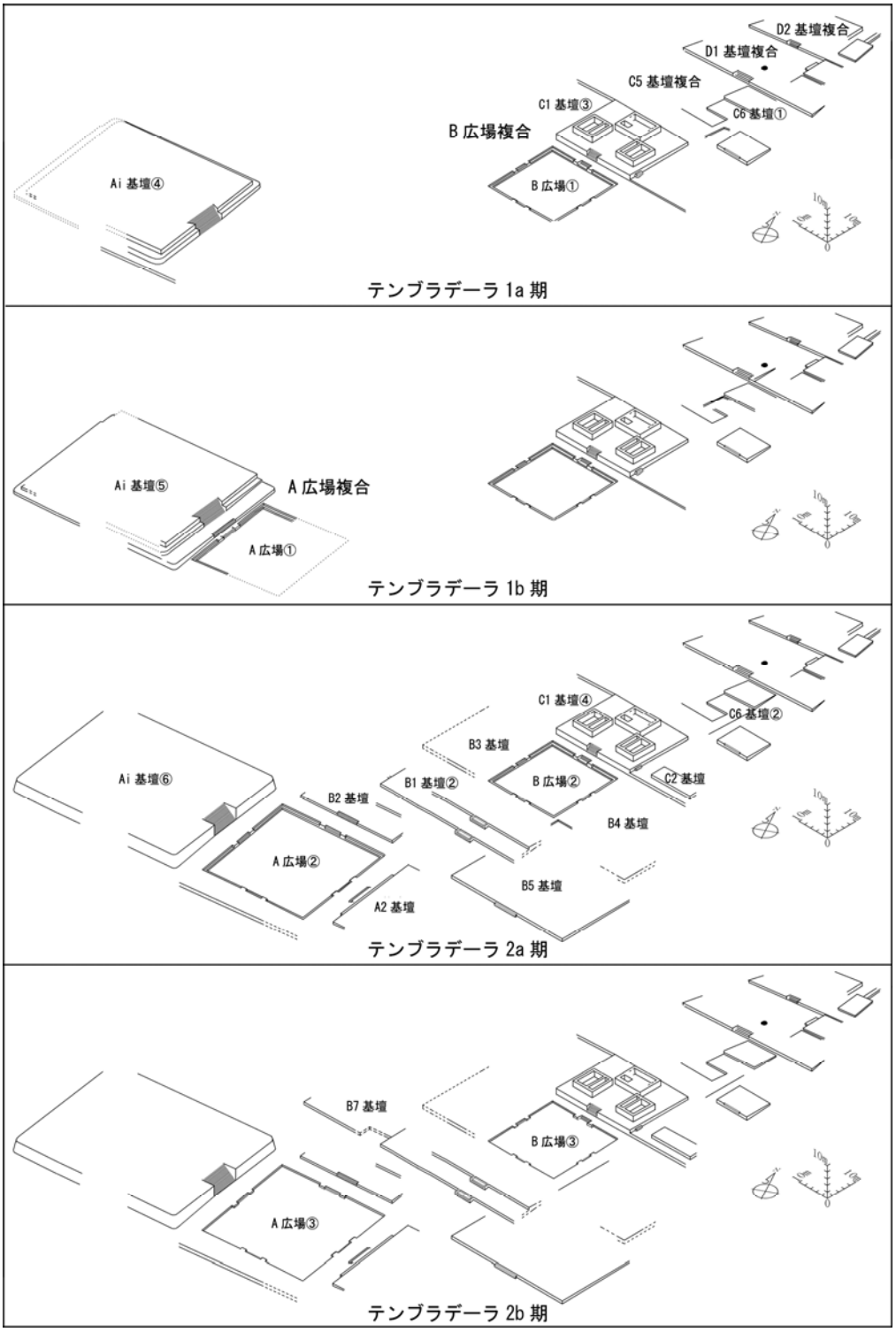


図 10-6　テンブラデーラ期の建築フェイズ

テンブラデーラ１期もまた 1a 期と 1b 期に細分可能で、A1 基壇の改変と A 広場の成立がその画期である。以下、広場とそれを囲む基壇とをあわせて、「広場複合」という単位として扱うが、A 広場複合が周囲から隔絶しているのに対し、B 広場複合は北側に増設された居住域 C5 基壇複合を介し、居住域 D1、D2 基壇複合と一連となっている。なお B 広場①の床下に、新たな建築要素であるカナルが設置された。また C6 基壇①が D1 基壇との間に幅 30cm のわずかなスペースを挟んで設置されているのは、山からの流水がテラス上から直接家屋に侵入しないようにという工夫とも取れ、アマカス期の災害の教訓を踏まえた対策が取られ始めたものと考えられる。しかしテンブラデーラ 1b 期の末、結局 B 広場①は降雨による水流で破壊される。なお A 広場・B 広場ともに２重の周壁と突出した階段袖壁を持つが、これはアマカス平原で他に例のない特徴的な形状である。

テンブラデーラ２期には最後の大規模な建設活動により、B 広場②が再建され、A 広場②が成立した。A 広場②は３基の基壇によって U 字型に囲まれている。これまで距離をおいて隔たっていた二つの広場は、床面・階段によって直接的に連結され、ラス・ワカス遺跡全体が巨大なひとつの神殿建築複合となったのである。テンブラデーラ２期もまた２a 期と２b 期に分けられるが、テンブラデーラ 2b 期の改変は比較的小規模で、二つの広場を埋め立てて浅くすることと、B7 基壇の建設のみである。しかし B7 基壇の建設活動は途中で停止し、ラス・ワカス遺跡は放棄されたと見られる。B7 基壇の下に敷き詰められた灰層・炉から得られた炭化物の年代は 2960±30BP（1150～1050b.c.ころ）であるが、実際の放棄の時点は 800b.c.あたりと見るのが適当であろう。

２−３．ラス・ワカス遺跡とモンテグランデ遺跡

モンテグランデ遺跡の土器分析者 C. ウルベルトは土器の分析結果と建築更新シークエンスを対応させ、形成期前期の居住期間を２つの時期に区分している。最初のモンテグランデⅠ期はワカ・アンティグアという神殿建築を中核とし、A 土器のみが使用されていた時期である。続くモンテグランデⅡ期にはワカ・グランデという神殿建築が新造され、A 土器に加えて B 土器が登場したとされる[Ulbert 1994]。ラス・ワカスではアマカス 1 期の小建築のみ、モンテグランデⅠ期と対応する可能性がある。つづくアマカス 2a 期に２基の大型基壇が成立した時点にはすでに B 土器が存在していた。すなわち神殿建築の成立はモンテグランデⅡ期と同時、もしくはやや後れていたことになる。

２−４．ラス・ワカス遺跡における埋葬

アマカス平原のアマカス期神殿群にはしばしば塔状墳墓が伴い(図 10-1)、神官階層が神殿の至近に葬られた可能性が示唆される。いっぽうラス・ワカス神殿には塔状墳墓のみならず埋葬じたいが極めて少なく、アマカス期 2a 期から 2b への更新の過程で、副葬品を持たない被葬者がおそらく生け贄として葬られた１事例しか見つかっていない。モンテグランデ遺跡では放棄に際して基壇上に塔状墳墓が設けられたとされ [Tellenbach 1986:294]、これが同時代のラス・ワカスの神官たちの墓だったのではないかという仮説を示しておく。

またテンブラデーラ期に至っては生け贄さえ見つかっていない。神官階層の埋葬は東に接する 13.18 遺跡・13.19 遺跡ではなかったかと考えられる。地方王国期に墳墓として再利

用され、現代の盗掘によって証拠が完全に失われているが、一帯で最大の神殿と墳墓群とが隣り合うという一致に意味を見いだすことができるだろう。

３．その他の遺跡の発掘調査

以下、発掘調査した７遺跡について、編年上の位置と、想定される社会的役割に関してのみ簡潔に述べる。

３－１．10.2 遺跡

10.2 遺跡[4]はアマカス平原の広がりの中では西寄りで、ラス・ワカスから 2kmほど西北西に位置する基壇建築である。最初にこの基壇が築かれたのも、放棄されたのもアマカス１期であったと考えられる。基壇上へ登るための階段は北側にのみ設けられているが、10.2 遺跡の北側には南側に入り口を持つ４基の神殿建築が並んでおり、10.2 遺跡と向き合っていることから、これら全体に緊密な結びつきが想定される。このまとまり「10.2 複合」は、モンテグランデ遺跡やラス・ワカス遺跡のように、やや距離をおいた複数の基壇から成る一単位の神殿建築と考えられる。

３－２．13.17 遺跡（図 10-2）

13.7 遺跡[5]はラス・ワカス遺跡の東方約 100m、谷ひとつを挟んだ丘陵上に接している。アマカス期に小規模な住居（北側の 13.7 遺跡など）が展開していたが、テンブラデーラ１期に方形広場と、それを囲む４基の基壇が建造され、テンブラデーラ２期まで改修を加えながら使用されたと考えられる。４基の中で西側の基壇が最大であり、ラス・ワカス遺跡A広場・A1 基壇に向いた軸を持つ。広場の形態がラス・ワカスと異なっており、ラス・ワカスに付随しつつも独自の儀礼的役割を持った神殿建築であったー墳墓群 13.18 遺跡と 13.19 遺跡を伴うことから、それはおそらく埋葬に関係する役割ではないか、という解釈を示しておく。なおチャウシス期（形成期後期Ⅱ）の土器も報告されており[Ravines 1982]、放棄された前時代の基壇を再利用して、居住が行われたものと見られる。

３－３．13.8 遺跡

13.8 遺跡[6]はアマカス平原の東端、北東からせり出した尾根上に位置するテラス状基壇群である。石材を産する露頭が近いためか、一帯で最大級の巨石を多数用いた神殿建築となっている。自然の浸食作用と構成の破壊により、良好なコンテクストから形成期の資料を採取することは出来なかったが、採取された資料数はアマカス期よりテンブラデーラ期が多いことから、主としてテンブラデーラ期に築造されたと仮定しておく。テラスの軸線は 13.17 遺跡と同様に、ラス・ワカス遺跡A広場・A1 基壇に向けられている。

---

4 PRAJによって登録が行われ、形成期と地方王国期の土器の出土が報告されている[Ravines 1981]。標高は海抜 385mとやや低く、貯水池の水位がおよそ海抜 400m前後であるため、88 年の貯水池開業以来ほぼ例年水面下に没している。

5 PRAJによって発掘調査が行われ、アマカス期とテンブラデーラ期、そして地方王国期の土器の出土が報告されている[Ravines 1982]。

6 PRAJによって発掘が行われており、アマカス期と地方王国期の土器の出土が報告されている[Ravines 1982]。

３−４．チュンガル遺跡

チュンガル遺跡[7]はアマカス平原の東のはずれ、13.8 遺跡から続く丘陵上に位置する。テラス状基壇群のうち少なくともひとつは、アマカス期に創設され、テンブラデーラ期には外側に床を巡らせて使用された。丘陵の東側の麓には平坦なテラスの連続である 14.14 遺跡が展開しており、やはりアマカス期からテンブラデーラ期にかけての土器が報告されていることから、全体としてややつくりの良い居住域ではないかと考えられる。

アマカス平原において唯一、レチューサス期（形成期後期Ｉ）の土器が確認された遺跡であるが、建築との関係が不明瞭であり、また器形がボトル型土器に偏っていることから、居住域ではなく墓地として利用されていた可能性を指摘しておく[8]。なおチュンガル遺跡も 14.14 遺跡も少ないながらもチャウシス期（形成期後期Ⅱ）の土器を伴っており、13.17 遺跡と同様、放棄された前時代のテラスを再利用した小規模な集落などが想定される。

３−５．レチューサス遺跡（図 10−7）

レチューサス遺跡[9]の立地はヘケテペケ川の南岸、南から下ってくるラマダ川との合流点の東側、切り立った河岸段丘の上で、現在のテンブラデーラ村の南東約 1kmに位置する。ヘケテペケ中流域において唯一、形成期後期Ｉに機能した神殿建築と見られる。東西 130m、南北 200mの範囲に基壇建築が展開しており、いずれもほぼ同一の方向軸に従っているため、全体が同時に機能した時期があったと想定される。北端は断崖となってヘケテペケ川に臨むが、その限界まで基壇建築が配置されているため、本来はさらに北まで建築が続いていたものが崩落して失われたのだろう。ラス・ワカスに比肩しうる広がりと言える。

遺跡の全体がヨナン山の裾に位置しているが、遺跡南端は山の斜面から突出した小高い丘陵で、そこに周壁を巡らせて高い基壇に加工してある。その上部には両面壁からなる、小さな部屋(AR1)と幅約 1mの回廊が組み合わさって載っている。A基壇と名付けたこの地点は、盗掘により甚大な破壊を受けていたが、レチューサス期の土器を地山直上の建築最下層から採取することができた。回廊の延長と床面張り替え、周壁の更新という建築の改変が一度起こっており、その際に副葬品を持つ埋葬（ATm-1）が床下に埋め込まれていた[10]。副葬品のひとつは鐙型ボトルで、太く丸い鐙部の形状と、アップリケと刺突を併用した器面装飾は、海岸部で後期クピスニケ[Elera 1998]などと呼ばれる、形成期後期Ｉの特徴を示している。ほかにＡ基壇で発掘された土器片は、鋸歯状ロッカースタンピング装飾のボトル型土器片や、よく磨かれた黒褐色の小型の半球鉢などである[11]。粗製土器の点数はむしろ少なく、出土土器の多くは破壊された墓に伴う副葬品だったと考えられる。

---

7 PRAJによって 14.10 という記号で登録されたことがあるが[Ravines 1981]、貯水池に水没したチュンガル村を北より見下ろす位置にあり、遺跡の載る丘じたいもチュンガルと呼ばれることが多い。

8 チュンガル遺跡周辺は、精巧な形成期の土器が出土することで名高く、1960 年代に盛んに盗掘がなされたと言われる。当時の古美術品市場において国際的に有名になった逸品には、レチューサス期の特徴を持つものも多く、それらがこの一帯から掘り出された可能性がある。

9 レチューサス遺跡は 2003 年の一般調査を通じて始めて登録されたが、当初は地方王国期チムーの土器を伴う遺跡としてのみ言及した[Tsurumi et al. 2003]。しかし 2004 年に再度、土器の表面採集を徹底的に実施したところ、形成期（前期、中期、後期前半）から植民地期まで、極めて長いシークエンスが確認された[Tsurumi et al. 2005]。

10 その副葬品にはレチューサス期の土器２点、人骨を加工したヘラ、ムラサキイガイの殻、淡水製のカニ、そして水銀朱らしきの赤い粉末がふりかけられていた。

11 地元住人のコレクションには、圏点文のスタンプを捺した半球鉢もあった。

また遺跡の北端、B 基壇と名付けた基壇の裾でも試掘を行った。B 基壇もやはり上部に多数の部屋を載せており、床下に副葬品を伴わない埋葬（BTm-1）が出土した。さらに下層からアマカス期・テンブラデーラ期の土器も出土している。建築じたいは、A 基壇との方向軸の共通性と埋葬の存在から、レチューサス期のものと仮定しておく。

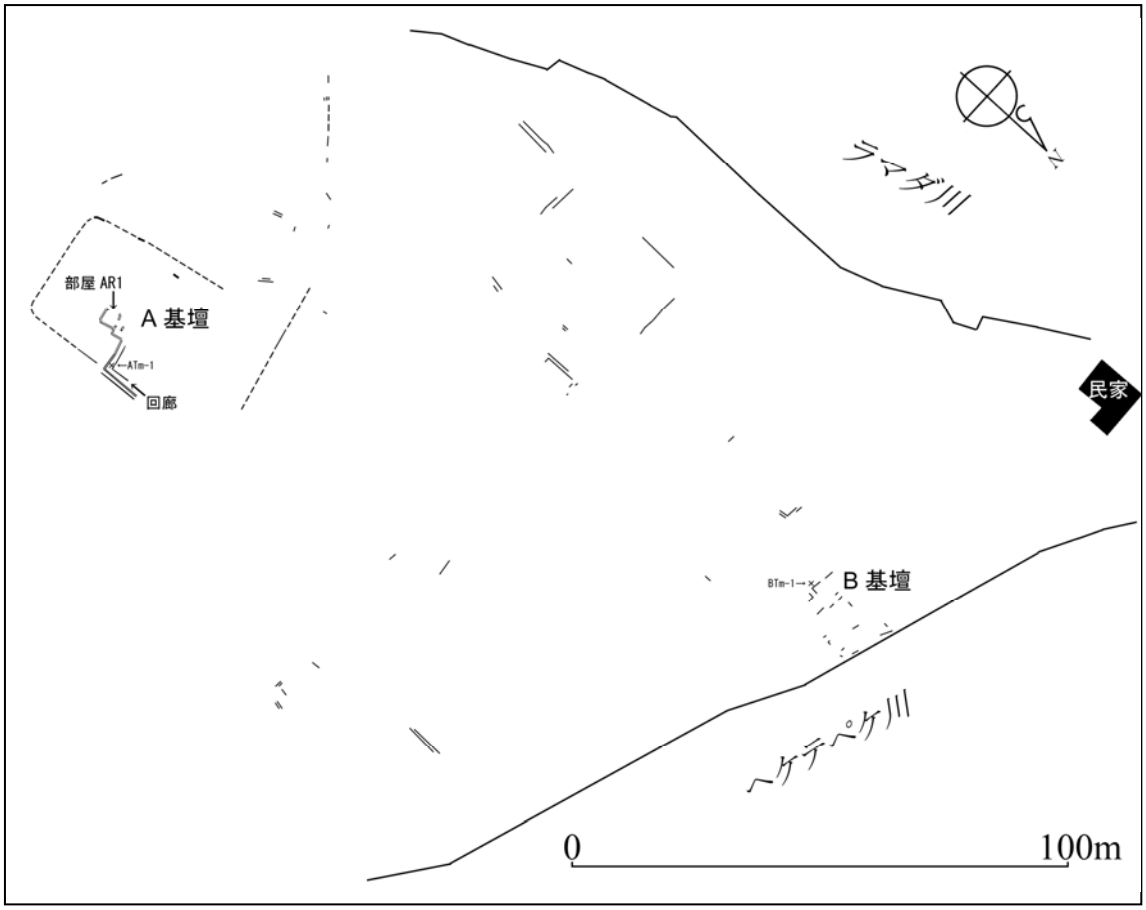


図 10-7　レチューサス遺跡

３−６．カンタリーヤ遺跡

カンタリーヤ遺跡[12]の立地はヘケテペケ川の南岸、切り立った河岸段丘の上で、ヨナン山の西の裾野にあたる。後代の基壇建築の下から発見された、形成期の基壇は極めて小規模で、記念碑的建造物とは性格を異にするものであり、モンテグランデやラス・ワカスにて確認された小規模な住居の基礎に近い。また出土遺物、とくに土器の内訳を見ると、日常的な器形の比率が極めて高い。これらの特徴からして、カンタリーヤ遺跡はアマカス期からテンブラデーラ期にかけて、小規模な居住域として機能したという見解が適切であろう。

12 2004 年の一般調査を通じて始めて登録された［Tsurumi et al. 2005］。

３−７．セロ・ヨナン遺跡

セロ・ヨナン遺跡[13]の立地はヘケテペケ川の南岸、切り立った河岸段丘の上で、ヨナン山の東の裾野にあたる。発掘の結果、形成期の建築の痕跡はつかめなかったが、出土土器から判断して、アマカス期、チャウシス期（形成期後期Ⅱ）、セロ・ヨナン期（形成期末期）においてなんらかの活動があったことが伺われる。ごく小規模な建築が想定され、また土器の器形も日常的なものが主体であることから、カンタリーヤ遺跡同様に、小規模な居住域であったと想定されよう。

４．その他の遺跡の先行調査と表面調査

ヘケテペケ中流域の既知の遺跡、新規登録された遺跡について、立地の概要と想定時期、機能について整理する。とくに引用元のない遺跡は、当研究において新規に登録されたものである。遺跡は規模と建築形態を参考に、暫定的に以下の４つに分類してある。「小規模な居住域・墓地」は、土器の散布のみが認められ、つくりの良い基壇建築がない地点である。「小規模な基壇建築」としたのは、小規模で単純なプランの基壇建築で、小規模な神殿、もしくは居住用テラスと想定される。「複合的な基壇建築」とは、複数の基壇・広場などからなる複合建築で、神殿であったと想定できる事例である。それらの中でとくに大規模なものを「大規模な神殿建築」として区別した。

以下、下流側から上流側へという順序で概観していくが、地理的条件と遺跡の分布とを関連づけて、一定の広がりを「地域」としてくくり、それぞれに現在の主要村落名を付すことにする。遺跡の分類と「地域」の設定については図 10−8 を参照されたい。

４−１．サポタル地域（ポルボリン遺跡）

ヘケテペケ川下流域の平野は、川を遡上するにつれて狭まり、サポタル村とベンタニーヤス村の中間で狭窄な中流域の谷間へと変わる。この地点の南岸には大規模なカラコル川が南東から合流している。その北岸に位置するポルボリン遺跡は、ヘケテペケ全流域を通じて最大の形成期遺跡で、PRAJ によって清掃・測量がなされている[Ravines 1985]。地表で確認できる土器はもっぱら形成期前期のもので、アマカス平原のものと極めて似ている。一方で円形半地下式広場や、最上部の円錐形アドベ建築などは、形成期中期の土器もまた採取できたという PRAJ の報告を裏付ける。

４−２．パイ・パイ地域

北岸ランパデン山と南岸ベンタニーヤス山によってポルボリン遺跡と隔てられた地域である。やや開けた河床が断続的に尾根で分断されており、北岸のエル・マンゴ、パイ・パイ、ガジート・シエゴ、南岸のラス・バラスに細分して考えることもできる。ただしこの地域には大規模な支流（ケブラダ）が流入してこない。エル・マンゴ遺跡は小規模ながら基壇建築で[Ravines y Matos 1983]その周辺に土器の散布地点が多く、小規模な居住域が周囲に展開していたと考えられる。パイ・パイ遺跡[14]と南岸のラス・バラス遺跡は、土器の

13 2004 年の一般調査を通じて始めて登録された［Tsurumi et al. 2005］。

14 至近に位置する岩絵についてピメンテールが報告しているが、付近で形成期土器は採取できないとされていた[Pimentel 1986]。

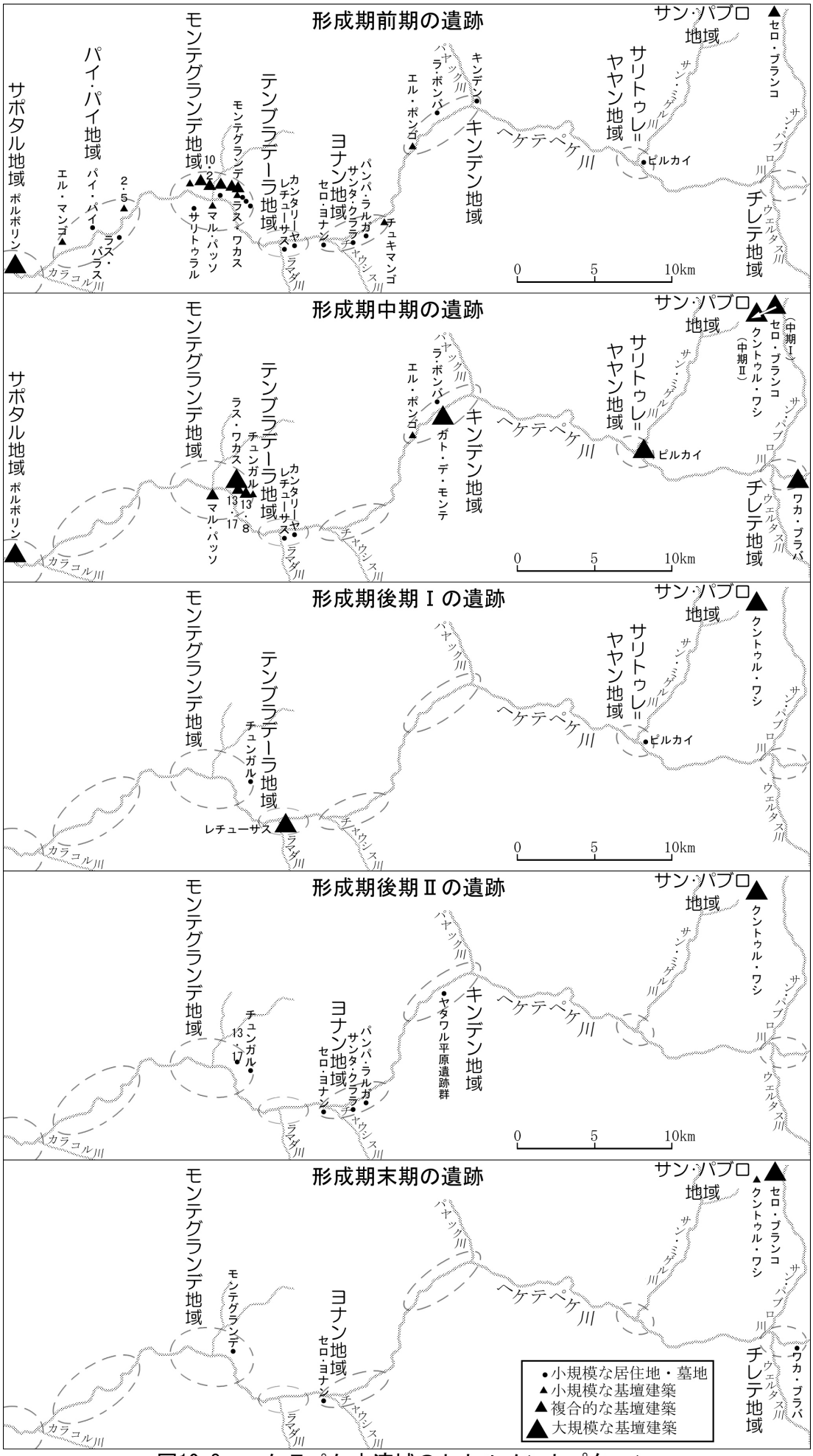


図10-8　ヘケテペケ中流域のセトルメントパターン

散布が見られるが建築がほとんど確認できない例である。2.5 遺跡はダム管理事務所内に位置し、現在は大きく破壊を受けているが、テラス状の基壇建築がかつて登録されていた[Ravines 1981]。これらはいずれも形成期前期の土器のみを伴う。

４−３．モンテグランデ地域

北岸アマカス平原とその対岸を含めた、中流域でもっとも開けた地域である。アマカス平原の遺跡群は 10.2 複合のように、複数の基壇から成る複合的な神殿建築が、東西約 4km の限られた範囲に密集したものと見られる。アマカス平原を東西におよそ２分すると、西半分はモンテグランデ川の下る緩傾斜地、東半分は河床から大きく立ち上がった段丘となっており、もっぱらアマカス１期に機能した 10.2 複合は西半分、アマカスⅡ期まで存続したモンテグランデ遺跡や、テンブラデーラ期まで存続したラス・ワカス遺跡などは東半分に分布するという傾向が認められる。なお緩やかな平原西半分においても、形成期の基壇建築はいずれも川からかなり離れている（500m 以上の距離、20m 以上の標高差）。より川に近い低地において、建築は不明確だが形成期土器が出土する地点が多数報告されているが、それらは耕作地・住居地の痕跡であるという仮説を示しておく。

形成期後期Ⅰにはチュンガル遺跡以外になんら活動の痕跡が見られない。つづく形成期後期Ⅱには 13.17 遺跡やチュンガル遺跡周辺に小規模な居住域があったと想定される。ワカ・カンポス[15]ではクントゥル・ワシ遺跡コパ期のCP-Marrón Inciso Toscoによく似た、図像化された獣面を持つ大型土器が見つかっており[Carcelén 1984]、形成期後期Ⅱのやや大規模な拠点があったのかも知れないが、確たる証拠はない。なお形成期末期にはモンテグランデ遺跡（第２丘陵東南複合）で土器の出土が報告されたのみである[Tam y Aguirre 1984]。

南岸に目を移すと、サリトゥラル平原では居住域と見られる低いテラス群を、マル・パッソ平原では同様のテラス群と、神殿遺跡マル・パッソを登録した。いずれの地点でも形成期前期（アマカス期）の土器しか採取していない。ただしマル・パッソ遺跡の大部分が形成期中期に建造されたものと見ている。それは広場の形状が、２重の周壁と突出した階段袖壁という、ラス・ワカス遺跡テンブラデーラ期神殿と共通したプランを持ち、床下にカナルまで備えていることによる。

４−４．テンブラデーラ地域

テンブラデーラ地域とモンテグランデ地域の間は、北岸こそチュンガルにおいて狭窄になるものの、川幅が広いため全体として大きな障壁は存在しない。しかし南岸のモスキート平原は、テンブラデーラの南あたりから切り立った河岸段丘の上に展開するようになり、レチューサス遺跡とカンタリーヤ遺跡はそのような段丘上に位置している点が特徴的である。なお 1943 年撮影の航空写真[16]によると、テンブラデーラ村の東端、チンギョン地区に５基の基壇がテラス状に配置されているように見える。該当地点は現在では採石場内で大きく削平されており、形成期の居住の痕跡は確認できなかったが、形成期の比較的大規模

15　ワカ・カンポス遺跡の３つの文化層のうち、「最初の時期（Periodo Inicial）」はアマカス期、「最後の時期（Periodo Ultimo）」は地方王国期であるが、中間の「最後から２番目の時期（Periodo Penultimo）」の時期は特定されていない。形成期後期Ⅱを含む、複数の時期の居住の痕跡が入り交じったコンテクストなのかも知れない。

16 Servicio Aerofotográfico NacionalによるProyecto S.A.N..170-546（1943 年５月４日撮影）。

なテラスがレチューサス遺跡と向き合っていたのかもしれない。

４−５．ヨナン地域

チャウシス川のヘケテペケ川への合流点の東西をヨナン地域とする。テンブラデーラ地域とはディエンテ・デ・ティグレ山（ヨナン山の支脈）で隔てられている。登録された形成期遺跡はいずれも南岸に位置する。発掘を実施したセロ・ヨナン遺跡と、チャウシス川をはさんだサンタ・クララ遺跡、それに東端の小規模な基壇建築チュキマンゴ遺跡には形成期前期の土器が見られる。またセロ・ヨナン遺跡、サンタ・クララ遺跡、パンパ・ラルガ遺跡に、チャウシス期（形成期後期Ⅱ）の小規模な居住域があったと考えられる。先述の通りセロ・ヨナン遺跡ではセロ・ヨナン期（形成期末期）まで居住が続いた。チュキマンゴ遺跡の東方は谷がふたたび狭まり、形成期遺跡の分布がとぎれる。

４−６．キンデン地域

ポンゴ村東端から再度谷が開け始める。北岸のポンゴ遺跡は上部が平坦で広い基壇建築で、文化庁によって登録され表面を清掃されている[Ravines y Matos 1983]。広場のない単純なプランで、もっぱら形成期前期・中期の日用的な土器を伴うため、神殿建築ではないのかもしれない。ラ・ボンバ遺跡は 1993 年に調査され、形成期前期の埋葬２基が発見されたほか、地表レベルでは形成期中期の土器も採取されている[Seki 1997]。南岸の段丘上に展開するヤタワル平原には、北に向かって開く U 字型基壇配置のものと、３段のテラス状のものと、ふたつの基壇複合が並んでいる。このガト・デ・モンテ遺跡は共伴土器が非常に少ないが、形成期中期の土器片が１点採取され、また U 字型基壇配置という建築の特徴から、形成期中期Ⅱの大規模な神殿建築と考えられる。その周辺には墓地や居住域と見られる土器の集積地点が分布し、形成期中期Ⅰ、中期Ⅱ、後期Ⅱの土器片が多数採取された。またパヤック川が北より注ぐ合流点のキンデン村内で形成期前期の土器が採取できた。

４−７．サリトゥレ=ヤヤン地域

キンデン村から東方に向かうと、モンテ・アレグレ村やサポタル村などの開けた平地が散発的に展開するが、形成期遺跡の分布は途絶えており、少なくとも大規模な公共建築は存在しなかったと見られる。サン・ミゲル川との合流点に至ると、サリトゥレ村・ヤヤン村の対岸、パレドネス集落の敷地内に大規模な基壇建築ピルカイ遺跡がある。採集される土器の傾向としては、形成期前期のものは少ないが、形成期中期Ⅰ、中期Ⅱが圧倒的に多く、種類も多様である。また少数ながら、クントゥル・ワシ期と共通するような形成期後期Ⅰの粗製土器を伴う。建築は２地点に分かれ、いずれも山裾に沿って長く伸びている。全体としてきわめて大規模であるため神殿建築と見なすが、広場などは未確認である。川に近いため浸食で失われたのかも知れない。

このサン・ミゲル川を北方に遡上すればクントゥル・ワシ遺跡へと至る。すでに破壊されているが､途中のサン･ルイス村にもかつて形成期の基壇建築が存在したとされており、形成期にサン・ミゲル川ぞいの移動ルートがあったことは確かであろう。

４−８．チレテ地域

ヤヤン村とチレテ村の間は調査計画に含めなかったため遺跡の存非は不明であるが、急峻な地形から推察すると形成期の大規模な公共建築は見込めない。次に登場する形成期遺跡は、サン・パブロ川、ウェルタス川との合流点チレテ村を少し過ぎ、南岸タバカル集落の後背の山上に位置するワカ・ブラバ遺跡である。測量と表面調査が実施され、カハマルカ盆地の後期ワカロマ期に通じる、すなわち形成期中期の土器の存在が報告されている[Ravines y Sachún 1993]。大規模な主基壇の上に多様な建築要素が載るという建築形態は、形成期前期よりも中期以降の特徴を示しており、基本的なプランは中期に建設されたと考えてよいであろう。なお、形成期末期の土器も採集されている。

このサン・パブロ川もクントゥル・ワシへ至るルートであり、途中のサン・ベルナルディーノ村のマイチリ遺跡の調査では、形成期の建築は発見されなかったものの、形成期前期の埋葬のほか、形成期後期Ⅰ，後期Ⅱの可能性を持つ土器が報告されている[井口 1998]。

５．ヘケテペケ中流域とサン・パブロ地域

以上のような中流域のデータを統合し、時期ごとにセトルメントパターンの特徴を指摘し、社会の動態を考察する。またセロ・ブランコ遺跡およびクントゥル・ワシ遺跡の社会動態を、中流域と関連づけて考察していく。なおカハマルカ盆地の形成期社会については、本書所収の関論文を参照されたい。

５−１．形成期前期

５−１−１．ヘケテペケ中流域：下流寄り諸地域の社会動態

形成期前期の遺跡はヘケテペケ中流域の全域に分布するが（チレテ地域のみ未確認）、建築がほとんどなく土器のみが採取できる、すなわち小規模な居住域と見られる地点が多い。また規模の大小こそあれ神殿建築も各地に分布していると見られる（テンブラデーラ地域については想定に基づく）。ただしヨナン地域以西の下流寄りにとくに多く分布する傾向があり、中でも明確に神殿建築の特徴を持つものはアマカス平原に多く集中し、規模においてはポルボリン遺跡が突出して大きい。この下流寄りの地域の特徴として、谷と谷とをつなぐ山間の重要な移動ルートの結節点ということを指摘しておく。ヨナン地域に流入するチャウシス川と、ポルボリン対岸に流入するカラコル川はともに、石期「パイハン文化」の遺跡が知られるトリニダ村の高地[Chauchat et al. 1998]に端を発しており、そこから南のクピスニケ谷やチカマ谷へ通じている。またアマカス平原を北上するとロコ・デ・チャマン谷を経由し、やはり石期の「ナンチョク複合」が知られるサーニャ谷中〜上流域[Dillehay 2000]へと至る。これらは定住村落の成立以前から狩猟採集活動に利用されてきたルートであろう。ヘケテペケ谷の定住化は海産食糧の獲得とマニオク農耕の導入という、新たな経済活動と密接に関係した動きと考えられるが[鶴見 2007]、谷全体に一様に起こった変化ではなく、より古くからの生業基盤の上に展開したことが伺われる。

データの多いアマカス平原の社会についてさらに考察してみる。M. テーレンバッハらによるモンテグランデ遺跡の調査は、神殿の周囲に非常に多くの住居が密集していることを明らかにし、この地域の神殿建築が居住の中核であることを明らかにした。また住居の中には、基壇の上に載った（よって水害への耐性が高い）造りの良い住居があること、副

葬品を伴う塔状墳墓の存在から、神官とその他の成員という階層分化がすでに始まっていたことも指摘された[Tellenbach 1986]。ラス・ワカス遺跡の発掘成果とあわせ見ると、このような階層分化と連動していると見られる変化が様々に起こっている。たとえば食糧については、そもそもの定住化の契機となったマニオクは比較的耕作が簡易であるが、水の安定した供給や刈り取り後の貯蔵を要するなど、より手のかかるトウモロコシ耕作がやや遅れて導入される。またモンテグランデⅡ期のワカ・グランデやラス・ワカスの C1 基壇には、入り口のない部屋という新しい建築要素が備わっているが、その居住性の低さ・密閉性からすると倉庫という可能性があり、物品の管理が次第に重要になってきたことが想定される。これらのことは、神官階層による統制が次第に強まっていく過程を反映しているのであろう。またラス・ワカス遺跡のアマカス１期は比較的小規模な住居がまばらに存在した状況であり、モンテグランデ居住域の拡張部であった可能性があるが、神殿の成立したアマカス２期には居住域がテラス状に整備され、モンテグランデで言うならば造りの良い住居が主体となる。このことから神殿のごく近くに起居する人口が限られてきたことが示唆される。同時に先述の通り、神殿の分布の中心がアマカス平原東半分の丘陵上に移動する傾向があり、高所と低所へと居住域が分かれていったことが推測される。このように西から東へと神殿の立地が移動していくのは、モンテグランデやラス・ワカスで確認されたような度重なる水害から逃れるために、標高の高い地点が選択されるようになっていったものと見ることができるが、それが同時に階層分化を促進しているのである。

５−１−２．ラ・コンガ神殿

ウルベルトの区分によればセロ・ブランコ遺跡ラ・コンガ期の土器には、カハマルカ盆地に由来する B 土器と、中流域に由来する A 土器とが混在している。B 土器に分類される物は大型の無頸壺や外反鉢などであり、土器自体や内容物の交易に伴ってもたらされたと見るのは難しい。むしろ原料と人口が直接的にカハマルカ盆地から中流域へと流入したものと想定される。カハマルカ盆地の前期ワカロマ期社会（形成期前期）と、同時期の中流域の社会とを比較すると、多様な生業形態を獲得し、早くも階層分化の兆しを見せていた中流域がより先進性であったのは確かである。積極的な交流を希求したのは後進的なカハマルカ盆地社会の方だったと見るべきかも知れない。そのためカハマルカ盆地より真西へ向かい、標高 3000m を超す山間を徒歩で２日ほど歩き、サン・パブロに到達するルートが形成期前期に確立されたのではないだろうか。この地域は現在でもチェティーヤ村など多数の村落が分布し、両地域間の交通路として利用されている。中流域の神殿は移動ルートの結節点に現れる傾向にあったが、セロ・ブランコ遺跡ラ・コンガ神殿の存在もまた、そのような視点から説明できる。ラ・コンガ神殿は前期ワカロマ期社会と密接な関係にあり、下・中流域から見れば、いわば山地の社会の窓口であっただろう。

５−２．形成期中期

５−２−１．ヘケテペケ中流域：大神殿の遍在状況

形成期中期の中流域全域において、セトルメントパターンに関して前期との大きな違いが２点生じている。まず１点目は、土器だけが地表に散布しているような、小規模な居住遺跡の事例が大幅に減少する点である。形成期中期の土器は大規模建築のごく至近でしか

採取できないのである（例外はカンタリーヤとラ・ボンバのみ）。データの充実したアマカス平原では、ラス・ワカス遺跡テンブラデーラ神殿などと同じ高度の丘陵上に、そのような居住域はいっさい確認されていない。形成期前期以来の階層分化が進行し、神殿周辺に起居する神官集団と、農耕などの活動に従事する一般成員とが、急峻な斜面の上と下に完全に分かれて居住するようになったのである。アマカス平原の外でもおそらく、同様の状況が進行しつつあったと想定されよう。２点目は、全体として小規模な神殿が減少するとともに、目立って大規模な神殿が 10～18km（道なり）ほどの長距離を保って各地に遍在するようになることである。具体的には、ピルカイやワカ・ブラバが新たに成立すると同時に、ポルボリンとラス・ワカスとの間、またアマカス平原とキンデン地域の間にあった小規模な神殿が姿を消している。もともと形成期前期から複数の神殿が並存していたアマカス平原に限って言えば、ラス・ワカスを頂点として統合された、神殿間のヒエラルキーが成立したものと考えられる[鶴見 2005]。しかしそれ以外の地域を含めた場合、それが地域を越えた社会統合の過程であったと（たとえばヨナン地域の社会が解体され、ラス・ワカス神殿とガト・デ・モンテ神殿に編入されたと）判断するのは現時点では難しい。形成期中期Ⅰと中期Ⅱという編年上の区分と照らしつつ、遺跡ごとに調査して検証すべき課題であろう。形成期中期Ⅱの社会は現時点の資料で判断する限り、リモンカルロなどの海岸部（沿岸部～下流域）社会と共通の要素が非常に強く（クピスニケ土器、U 字型基壇配置など）、沿岸部・下流域・中流域の全体を連続的に俯瞰する視座が必要である。神殿建築がとくに多く並存する、下流域の社会動態のさらなる解明が鍵となるであろう。

なお形成期前期から中期にかけて、ラス・ワカス遺跡の土器に興味深い変化が起こっている。アマカス期の A 土器の場合、ボトルや鉢といった精巧な土器と、より日用的な無頸壺などの土器とで、器壁の厚さや表面調整、焼成などに大きな差がない。テンブラデーラ期にも同じ胎土や文様パターンの土器が製作されるが、日用的な土器の造りは次第に粗くなっていき、器壁が厚く、焼成の悪いものになっていく。一方でボトルや鉢は薄く、焼成がよく、丁寧な仕上げのものが増えていく。このような変化は、あらゆる土器を同一の製作者が手がけていた形成期前期と、土器の性質に応じて別々の製作過程が採られる、すなわち製作者が専業化しつつあった形成期中期、という差異の反映ではないだろうか。筆者はかつて、クントゥル・ワシ遺跡などの鐙型ボトルの内面を観察し、これらの精巧な土器の製作は、特殊な製作手順を共有する専業的な集団が担っていた、という可能性を指摘した[鶴見 2000]。このような専業的な土器製作者集団は、階層分化の進行する中で次第に形成されたのではないか、という見通しが得られたのである。

５−２−２．セロ・ブランコ神殿とイドロ神殿

セロ・ブランコ神殿とイドロ神殿の全容は不明だが、いずれも大規模な基壇複合である。出土土器の傾向は、ラス・ワカス遺跡テンブラデーラ１期と前者、２期と後者に共通性が見られるため、時期差を想定するのが適切であろう。年代測定の結果もこの見解を支持するものとなっている。カハマルカ盆地の土器編年にはこのように明確な区分はない。

このことを踏まえた上で中流域とサン・パブロを比較すると、様々な共通点を指摘できる。まず中流域では形成期中期に、規模の近い神殿が２つ同時に近接・並存する例はない。近接する場合はモンテグランデ地域のラス・ワカスと 13.17、13.8、マル・パッソや、キン

デン地域のガト・デ・モンテとポンゴのように、明確に規模に差があり、ヒエラルキーが想定できる事例のみである。これはセロ・ブランコ神殿とイドロ神殿が同時に機能しなかったという見解と一致する。さらにラス・ワカスでは、テンブラデーラ期には神殿内部にではなく、神殿至近の外部に墳墓を設けていたが、同様にセロ・ブランコ神殿でも現時点で墓が発見されておらず、イドロ神殿でも極めて少ない。また放棄後のセロ・ブランコに設けられた「１号墓」は副葬品からするとイドロ期のものと考えられるので、イドロ神殿はその内部ではなく、至近・外部に埋葬を設けていたことになる。また立地についても、サリトゥレ・ヤヤン地域のピルカイから長い距離を隔てており[17]、中流域における神殿分布の原則があてはまる。

これらのことから以下のことが言える。セロ・ブランコ神殿やイドロ神殿は形成期前期に引き続き、サン・パブロ地域における地域的な中核として機能していたが、その役割や埋葬儀礼などは中流域と共通性が極めて高かった。形成期前期のサン・パブロ地域はむしろカハマルカ盆地との紐帯が強かったと見られるが、そのカハマルカ盆地では形成期中期に大規模な神殿建築が盆地西部に複数並存するという、異なったセトルメントパターンが現れている。土器編年もカハマルカ盆地よりも中流域と同調しており、海岸出自のクピスニケ土器が導入される中期Ⅱに神殿が大幅に改変される（イドロ神殿の新築）ことも示唆的である。サン・パブロ地域の形成期社会はこの時点で、高地・東斜面カハマルカ盆地社会よりも、西斜面ヘケテペケ谷社会の一端という性格を強めたのではないだろうか。

なおサン・パブロから中流域の谷底へ下るルートは２本あるが、とくに海岸との交流に注目するならば、サン・パブロ川以上にサン・ミゲル川が重要であったか可能性は高い。イドロ神殿からは、セロ・ブランコ神殿からは望めなかったサン・ミゲル川の眺望が開ける。このこともまた、ヘケテペケ谷との連帯の強まりを示唆しているように思われる。

５−３．形成期後期Ⅰ

５−３−１．ヘケテペケ中流域：レチューサス神殿

ラス・ワカスをはじめとしてアマカス平原の神殿群が放棄され、比較的近いレチューサス遺跡が大規模な神殿建築へと変化する。レチューサス神殿はラス・ワカス遺跡テンブラデーラ神殿に匹敵する建築規模で、高い段丘上という立地も共通する。中核であるＡ基壇はさらに独立峰状にそびえ立つ丘陵状に載っており、回廊と部屋とが入り組んだ複雑な建築形態や、回廊出口の一対の土坑から扉もしくは棒の差し渡しが想定できるなど、神殿中核へのアクセスの統御はアマカス平原の神殿群より徹底している。そこには形成期中期までの神殿・社会の統合化と、階層分化のさらなる進行という側面が見いだせる。

またレチューサス神殿の立地選定には、アマカス平原での度重なる水害を踏まえて、標高のある上流方面へのさらなる退避という側面も当然あったのだろう。レチューサス神殿の中核と見られるＡ基壇は先述のような立地ゆえに、山からの水流をかぶることがまずないのである。ただし先述の通り水害は単なる偶発的なイベントではなく、段丘の上下にセトルメントを分割し、階層分化を景観面において促進・固定化させるという、アマカス平

17 直線距離だとサリトゥレ＝ヤヤンからサン・パブロは約 12km で、中流域の神殿間の区間距離として標準的である。しかし急斜面であることを踏まえて移動コストを計算するなら、中間地点のサン・ルイスの形成期遺跡を含め、２区間と見るほうが正確な評価かも知れない。この点は今後、GISによる分析課題としておく。

原社会の統合化の一要素であるのは言うまでもない。

なお、海岸空白現象と関連する大規模なエル・ニーニョ現象と、それに伴う長期的な気候変動が、この時期に起こったかどうかはまだ分からない。ラス・ワカスの放棄とレチューサスの成立は、水害をひとつの契機としたかもしれないが、特別視すべき規模のカタストロフィであったか否かの判断は保留としておく。

以上のようにレチューサス神殿の成立は確実に、形成期前期以来のローカルな社会変化の延長上に位置しているのだが、一方で新たな動きを見逃してはならない。まず埋葬儀礼が一変し、神殿の床下に多数の墓が設けられるようになる。しかもこれは形成期前期以来の中流域の伝統である塔状墳墓と違う、新たな埋葬形態である。そして同時に中流域全体、おそらく下流域にかけてまでの神殿が放棄されていることも重要である。この点を以下、クントゥル・ワシ神殿との関係から整理していく。

５−３−２．　クントゥル・ワシ神殿

クントゥル・ワシ神殿とレチューサス神殿は、ヘケテペケ谷からサン・パブロ地域にかけての広範囲において、ただ２つの神殿となる。同時に、それまでおそらく相当数の人口を抱え、神殿を中核として集落を形成していた多くの地域が、神殿を持たなくなったことになる。そのような地域社会の性質が不明であるため、これを地域間での社会的統合の結果であると断定することは避けたい。ただしヘケテペケ谷の連続的な社会動態の文脈においては、少なくとも信仰の対象としての神殿が、一貫して減少傾向にあることは指摘されねばならない。

２つの神殿は出土土器の特徴はもちろんのこと、神殿内に墓を多数組み込む点、独立峰に周壁を巡らせて神殿とする点（コパ山山頂という立地選定じたいはイドロ期以来であるが）などに共通性が見られ、また単純に面積を比較すると両者はほぼ拮抗する規模である。しかしクントゥル・ワシに多数設置された石彫がレチューサスでは知られていないなど、単純に対置できない側面もあるので、それ以上の比較は将来、レチューサス神殿の全容がつかめてからの課題としておく。

かつてクントゥル・ワシ神殿の成立は海岸部の空白化と連動した現象と見られていたが、仮に海岸空白現象が大きな気候変動に起因したものだったとしても、レチューサス遺跡が発見された以上、中流域にまで深刻な影響は及んでいなかったことになる。たしかにクントゥル・ワシ期には潜水に起因する外耳道骨腫を持つ人物などがいたが、単純にヘケテペケ谷を西から東へと上るような人の動きだけでは、およそ説明できないのである。またそもそも、海岸部でも形成期後期Ｉの精巧な土器がさかんに墓から盗掘されていること、他の谷では海岸部に神殿建築が存続した事例もあることから、ヘケテペケ谷海岸部の事例はあくまでも「神殿不在の状況」と評価すべきなのであろう。

それではクントゥル・ワシ神殿の成立はいかなる社会動態の中に位置づけられるのであろうか。土器や図像の特徴に見られる地域間の共通性などから、中央アンデスの極めて広い範囲で観察される現象、いわゆるチャビン・ホライズン論の一端としてクントゥル・ワシ神殿はしばしば言及されてきた。しかしより限定された地理的範囲の中で、その成立過程を説明することはできないだろうか。あくまでも仮説であるが、クントゥル・ワシ期の精巧な黄金製品の類例の分布は、カハマルカ北部ハエン地方のインガタンボ遺跡[山本

2006]やトメペンダ遺跡[Nuñez 1998]などから、ランバイェケ水系中流域のチョンゴヤペ[Lothrop 1941]、サーニャ谷下流域のセロ・コルバッチョ[Bonavia 1994]などにかけてであり、いずれもヘケテペケ谷以北である。また形成期後期に始まった技法ではないが、多彩色（焼成後顔料充填を除く）の土器の分布などもこれに重なっており、ピウラ谷のニャニャニケ遺跡[Kaulicke 1998]や、ハエン地方のバグア複合の遺跡群[Shady 1987]などとも関連する動きかも知れない。重要なのは、ヘケテペケ谷がこれら２つの要素の南限だということである。サーニャ谷からはサン・ミゲル地方を経由してクントゥル・ワシ遺跡に到達することが可能であり、クントゥル・ワシ神殿の成立には北方からの、また熱帯雨林方面からの、新たな儀礼体系が深く関わっているかもしれない。また先述の通り、サーニャ谷からアマカス平原へのルートも古くからあるので、レチューサス神殿も同様の影響下で成立した可能性がある。クントゥル・ワシ神殿とレチューサス神殿の成立は、とくにヘケテペケ川以北と関係する広域的な社会変動と、ヘケテペケ谷における地域的な傾向とが、何らかの形で合わさった結果であろうという見通しを示しておく。さらなる議論のためにはデータの充実が必須であろう。

５−４．形成期後期Ⅱ

５−４−１．ヘケテペケ中流域：神殿の消滅

形成期後期Ⅱへの移行時点までにレチューサス神殿が放棄され、それによりアマカス平原とヨナン地域、そしてキンデン地域に土器の散布が認められるだけで、中流域を通じて神殿建築の建設が行われなくなったと見られる。ただし河床に引き続き多くの人口が居住していたとするならば、発見された遺跡は依然として段丘上の特別な立地にあるため、それぞれが地域社会の中で特別な役割を果たしていた可能性がある。

５−４−２．コパ神殿

形成期後期Ⅰまでに見てきたように、ヘケテペケ谷の神殿は一貫して減少する傾向があり、後期Ⅱにおいてついにコパ神殿が唯一のものとなる。このコパ神殿と中流域各地の地域社会との関係はどのようなものであったのだろうか。中流域で採取された土器について言えることであるが、コパ期の土器との共通性はあっても、製作の拠点は各地域に独立して存在していたようである。たとえばキンデン地域の資料は胎土が灰色を呈し、文様こそ共通であるが刻線の引き方が粗雑である。ヨナン地域のものは鉢の形状や器面調整がコパのものと似ているが、限られた文様パターンしか持たない。これらの地域社会はコパ神殿を信仰の対象としたり、技術や資源を交換していた可能性はあるが、あくまでも地域ごとに独自に展開していたと見るべきであろう。

なおヘケテペケ谷のいずこかからの盗掘品とされる完形土器の中に、コパ神殿の土器そのものといった特徴を持つ個体が複数知られているが[18]、いずれも破損が皆無もしくは軽微であるため、降雨が多く堅く締まった山地の土ではなく、乾燥した砂地の土から掘り起こされたと見られる。すなわちヘケテペケ川の本流、とくに中〜下流域から出土したものであろう。これまで登録された限りでは、アマカス平原の土器はもっともコパ期のものに

18　図録集[Alva 1986]に鐙型ボトル、長頸ボトルの例があるほか、テンブラデーラ考古学博物館に半球鉢が収蔵されている（未刊行）。

近く、この地域がコパ神殿と密接だった可能性はあるが（先述のワカ・カンポスなど）、確証はない。コパ社会と中流域との関わりについては今後の課題とすべき点が多い。

５−５．形成期末期

サン・パブロ地域では、セロ・ブランコ遺跡にソテーラ期の大規模な神殿、クントゥル・ワシ遺跡にエリート層の住居が設けられており、カハマルカ盆地のライソン期社会と密接な関係が伺われる。いっぽう中流域では、土器の散布地としてチレテ地域が加わり、キンデン地域がはずれたという以外に前時期と大きな変化はなく、大規模な建築が造られない状況が続いている。ただしアマカス平原とヨナン地域の土器は、山地のライソン期の典型的なものばかりであった。その要因は二通り考えられる。一つは、コパ期に比べてライソン社会がより積極的に、中流域に拠点を設けていたということである。ライソン社会と海岸部のサリナール文化に交流があったことは、モチェ谷のセロ・アレーナ遺跡などから推察できることであり、ライソン社会が中流域まで展開していても不自然ではない。そして、ライソン社会の建築がとくに小高い山頂を選んで設けられていたならば、河岸段丘を中心とした本調査では十分にデータを集められなかったおそれがある。もう一つは、本研究を通じて中流域各地で採取した遺物の中に、海岸部と共通するものや、各地域独自のものなどがありながら、知見の不足ゆえに見落としている可能性が否めないということである。サリナール文化の社会はヘケテペケ谷沿岸部のプエマペ遺跡に多くの墓を残しており、こちらもの痕跡も中流域にあっておかしくない。いずれにしても今後、データを蓄積することが必要である。

６．結語：「ヘケテペケ上流域」としてのサン・パブロ

本研究はヘケテペケ中流域における社会変化過程のみならず、サン・パブロ地域との関係を解明することを目的としていた。この課題に関しての現時点での見解を述べて本稿の結びとしたい。

ヘケテペケ川の本流を基準とすると、クントゥル・ワシ遺跡を擁するサン・パブロ地域は北方に外れた地域という印象を受ける。しかし下〜中流域と、東斜面カハマルカ盆地の形成期社会との関わりにおいて、チレテ以東の上流域以上にむしろ、サン・パブロ地域の社会は重要だったのかもしれない。これには３つの根拠がある。第１に自然環境の連続性で、中流域とサン・パブロ地域はいずれも山間ユンガの気候帯に属し、共通の動植物資源を有する。また両地域を結ぶサン・ミゲル川やサン・パブロ川は枯れ谷（quebrada）ではなく川（río）であり、恒常的な水資源を提供している。よってサン・パブロ地域は地誌学的に「もうひとつの上流域」になりうるのである。第２に、遺跡・遺物分布の連続性である。カハマルカ盆地と中流域との中間で、形成期の全時期を通じて大規模な社会が存続したのはサン・パブロ地域が唯一である。またカハマルカ盆地の西部は形成期を通じて遺跡が集中している地域で、前期に居住が始まり、中期以降にはクンベマヨ水路とワカロマやライソンなど大型神殿群が成立、末期もライソンなどの大規模建築群が存続した。このことはカハマルカ盆地社会が、盆地内部のみならず西方の海岸方面への関心を持ち続けたことを伺わせるが、さらに特定的に、サン・パブロとの間の具体的な山越えルートと結びついた遺跡分布と見ることもできよう。そして第３にこれまで述べてきたとおり、サン・パ

ブロ地域とヘケテペケ谷をリンクさせることで、中流域で解明されたセトルメントパターンの変化、とくに形成期後期Ⅱまでの、神殿数の減少という一貫した流れの中に位置づけられるという点である（もっとも第２・第３の指摘は、チレテ以東の調査が進展すれば見直しを迫られる可能性があることも明記しておく）。

このような連続性の中で、中流域と「上流域」サン・パブロとの社会的関係は時期ごとに絶えず変容していた。形成期前期のサン・パブロ社会は、高地カハマルカ盆地がヘケテペケ谷と交流しようとする、その動きの中で成立した。しかし中期のサン・パブロはむしろ中流域と、そして中流域を通じて海岸部社会と連続性の高い社会となった。後期Ⅰにはより広域的な社会変動と、ヘケテペケ谷の地域的な社会変動の過程で、サン・パブロと中流域に一つずつ神殿が成立する。やがて後期Ⅱにはサン・パブロが神殿を維持するいっぽうで、中流域は神殿を持たない地域社会へと変容する。そして末期のサン・パブロは再びカハマルカ盆地と密接な関係を持つようになるのである。

以上のように整理してくると、形成期後期Ⅰ・後期Ⅱの社会変化に関する説明はまだ不徹底であると言わざるを得ない。すなわち、レチューサス神殿とクントゥル・ワシ神殿が成立する過程と、前者が放棄される一方で後者がコパ神殿へと変容する過程について、より具体的な要因を探らねばならない。これが今後のヘケテペケ中流域研究における最優先課題である。まずはレチューサス遺跡のさらなる調査が必要であろう。

参考文献

Alva, Walter

1986 *Frühe keramik aus dem Jequetepeque-Tal,Nordperu/ Cerámica temprana en el Valle de Jequetepeque, norte del Perú.* Marerialien zur Allegemeinen und Vergleichenden Archäologie, Band 32, München.

Bonavia, Duccio

1994 *Arte e historia del Perú antiguo.* Banco del Sur del Perú, Arequipa.

Carcelén Silva, José

1984 Los trabajos realizados en la Huaca Campos de Montegrande. *AVA-Beiträge* 6: 520-540.

Chauchat, Claude., Cesar Galvez M, Jesus Briceño R. Y Santiago Uceda C.

1998 *Sitios Arqueológicos de la zona de Cupisnique y margen derecha del Valle de Chicama.* INC-Trujillo y IFEA-Lima.

Cholán Cabanillas, Raúl, Tsurumi, Eisei, y Yasutake Kato

2006 *Proyecto arqueológico: Las Huacas, Valle Medio de Jequetepeque, provincia de Contumazá, Depto. de Cajamarca en el 2005.* Informe preliminar presentado al Instituto Nacional de Cultura.

Dillehay, Thomas D.

2000 *The Settlement of the Americas.* Basic Book.

Elera Arévalo, Carlos Gustavo

1998 *The Puemape Site and the Cupisnique Culture: A Case Study on the Origins and Development of Complex Society in the Andes, Perú.* Ph. D. Dissertation.

University of Calgary, Calgary.
井口欣也
1998　『ペルー北部形成期遺跡マイチリの発掘調査と遺跡保存のための事前調査』平成９年度高梨財団助成金調査・研究報告書.
Kaulicke, Peter
1998　El Periodo Formativo de Piura. *Boletín de Arqueología PUCP* 2:19-36.
Keating, Richard. W.
1980　Archaeology and Development: the Tembladera Sites of the Peruvian North Coast. *Journal of Field Archaeology* 7: 467-475.
Lothrop, Samuel K.
1941　Gold Ornaments of Chavin Style from Chongoyape, Peru. *American Antiquity* 3:250-262.
Nuñez, Quirino Olivera
1998　Evidencias arqueológicas del Periodo Formativo en la cuenca baja del rio Utcubamba y Chinchipe. *Boletín de Arqueología PUCP* 2:105-112.
Paredes Abad, María Isabel
1984　El complejo sur de la Meseta 2 de Montegrande. *AVA-Beiträge* 6: 505-512.
Pimentel Spissu, Víctor
1986　*Felszeichnungen im mittleren und unteren Jequetepeque-Tal,Nord-peru/ Petrogrifos en el Valle Medio y bajo de Jequetepeque, norte del Perú.* Marerialien zur Allegemeinen und Vergleichenden Archäologie, Band 31, München.
Ravines, Rogger
1981　*Mapa arqueológico del valle del Jequetepeque.* Proyecto de Rescate Arqueológico Jequetepeque, Lima.
1982　*Arqueología del valle medio del Jequetepeque.* Proyecto de Rescate Arqueológico Jequetepeque/ Instituto Nacional de Cultura, Lima.
1985　Early Monumental Architecture of the Jequetepeque Valley, Peru. In *Early Ceremonial Architecture in the Andes*, edited by C. Donnan, pp.209-226. Dumbarton Oaks, Washington D.C.
Ravines, Rogger y Alejandro Matos Avalos
1983　*Inventario de monumentos arqueológicos del Perú: zona norte.* Imstituto Nacional de Cultura, Lima.
Ravines, Rogger y Jorge Sachún
1993　Monumentos arqueológicos tempranos de la region cisandina de Cajamarca. *Boletin de Lima* 87:8-14.
坂井正人、徳江佐和子、鶴見英成、芝田幸一郎
2000　「ペルー北海岸における考古学遺跡の一般調査（1998、1999年）」『山形大学歴史・地理・人類学論集』1:51-91.
Seki, Yuji

1997 Excavaciones en el sitio La Bomba, Valle Medio de Jequetepeque, Depto. Cajamarca. *Boletín de Arqueología PUCP* 1:116-136.

Shady Solís, Ruth

1987 Tradición y cambio en las sociedades formativas de Bagua, Amazonas, Perú. Revista Andina 5(2):457-487.

Tam Chang, Manuel y Irris Aguirre de Tam

1984 El complejo sur-este de la Meseta 2 de Montegrande. *AVA-Beiträge* 6: 513-519.

Tellenbach, Michael

1986 *Die ausgrabungen in der formativzeitlichen siedlung Montegrande, Jequetepeque-Tal, nord-Peru.* Marerialien zur Allegemeinen und Vergleichenden Archäologie, Band 39, München.

鶴見英成

2000 「中央アンデス形成期における鐙型ボトル成形プロセス」『古代アメリカ』3:52-65。

2004 「ペルー北部、ヘケテペケ川中流域の形成期社会の研究 －2003 年度ラス・ワカス遺跡発掘調査と一般調査」『古代アメリカ』7:19-32.

2005 「先史アンデス文明形成期における社会統合過程－ヘケテペケ川中流域の事例より－」『マヤとインカ』貞末堯司編 pp.225-236、同成社、東京。

2007 「ラス・ワカス遺跡の自然遺物」『チャスキ』33:30-34、原人舎、東京。

Tsurumi, Eisei, Regina Abraham Fernández y Yasutake Kato

2003 *Proyecto arqueológico: Las Huacas, Valle Medio de Jequetepeque, provincia de Contumazá, Depto. de Cajamarca.* Informe preliminar presentado al Instituto Nacional de Cultura.

Tsurumi, Eisei, Evelyn Anyanett Mora Colonado y Yasutake Kato

2005 *Proyecto arqueológico: Las Huacas, Valle Medio de Jequetepeque, provincia de Contumazá, Depto. de Cajamarca en el 2004.* Informe preliminar presentado al Instituto Nacional de Cultura.

Ulbert, Cornelius

1994 *Die keramik der formativzeitlichen siedlung Montegrande, Jequetepequetal, nord-Peru.* Marerialien zur Allegemeinen und Vergleichenden Archäologie, Band 52, Mainz.

山本睦

2006 「ワンカバンバ河谷の一般調査」『チャスキ』33:27-36、原人舎、東京。